『非常手段』覚え書

増山　学

1

陽の目を見なかったトマス・ハーディ(Thomas Hardy)の処女作『貧乏人と淑女』(*The Poor Man and the Lady*, 1868)は、中央と田園という二つの対照的経験を素材にした作品で、「社会を改良したいという情熱に燃える青年」(Florence Emily Hardy: *The Life of Thomas Hardy*, p. 61)を主人公にしたものであった。しかし、「革命的とまで言わなくても社会主義的」(*Life*, p. 61)なこの小説は、作者の意識過剰のみ目立つ「未熟な想像物」(*Life*, p. 61)にすぎず、折角の好素材も不発に終った。

書店の依頼で、その原稿を読んだジョージ・メレディス(George Meredith)は、因襲的批評家の非難を避けるため、処女作で旗幟を鮮明にする愚を説いた。そして、「もっと複雑なプロットをもった、純然たる芸術的想意に富んだ小説を試みたらどうだろう。」(*Life*, p. 62)と付け加えたという。

田舎の建築事務所に勤める傍ら、ハーディが次に書き上げたのが『非常手段』(*Desperate Remedies*, 1871)である。種々の経緯の末、一八七一年三月二十五日、三巻本として匿名で出版された。だが、『ハーディ伝』に依れば自信作ではなかった。「ジョージ・メレディスの忠告を、余りにも未熟に解釈したため、荒っぽいと迄言わな

くても、力強いメロドラマ的場面が構成されたが、そのスタイルは彼本来の気質に全く反したものであった。それは執筆しようなんて夢想だにしなかった種のもので、窮地に陥ったため、万難を排しても大衆の注意をひく必要があると思われるものであった。」(*Life*, p. 85)

『アシニアム』(*Athenaeum*) と『モーニング・ポスト』(*Morning Post*) は概ね好意的であったが、『スペクティター』(*Spectator*) は痛烈な酷評を掲げた。その批評を読んだハーディは、「その瞬間の悲痛さは決して忘れられなかった。終始、死んだ方がましだと思った。」(*Life*, p. 84) と告白している。しかし、リンゴ酒造りの場面を始め、田園風景を引用して称揚してくれた点は、ハーディに将来の方向付けを与えた。

2

『非常手段』の扉頁には、サー・ウォルター・スコット (Sir Walter Scott) の『僧院』(*The Monastery*) の序文の一節が引用されている。「相互に連係のない一連の異常な事件が、自然界において頻繁に起こるが、ロマンス作家の領域は人為的要素に富んでいるので、単に赤裸々な現実の姿に従順であるだけでなく、それ以上のものが彼に求められるのである。」

プロットに対する要請が先行して、メロドラマ的に堕した弁明として、自らをロマンス作家に擬したのであろう。ただし、ハーディが詩人スコットを小説家スコットより尊敬していたのは興味深い。(cf. *Life*, p. 49) またその当時、複雑なプロットを駆使し、煽情的作家として人気のあったウィルキー・コリンズ (Wilkie Collins) の影響も考えられる。ジョージ・サンプソン(George Sampson)はコリンズを評して次の如く述べている。「彼は前兆を予示する雰囲気をおこすか、自然の風景に憂うつや恐怖を暗示する荒廃を与える力を有する。…ウィルキー

・コリンズの主要な欠点は、からくりの乱用である――推理のからくりでなく叙述のからくりである。日記、記録、回顧録、告白、等々、迫真性のため計画されたのであろうが、結局は退屈を招くだけである。」（George Sampson: *The Concise Cambridge History of English Literature*, p. 796）『非常手段』は明らかに煽情的雰囲気とゴシック趣味の要素を包含し、また書簡を多数挿入したり、最後に長文のマンストン（Manston）の遺書で終るのもいかにもコリンズの亜流である。

本書の初版には序文がなかったが、一八八九年版に序文が附されている。『非常手段』は作者が一つの方法を摸索していた頃のもので、「その構成上守られた原則は興味を喚起するために、余りにもミステリ、筋の紛糾、意外性、不道徳に比重がかかりすぎている」と反省を重ねている。しかし実際は、メロドラマ調で始まったのが、後半で煽情主義的に変調したのである。

3

開巻冒頭の第一章では三十年間の出来事が語られる。各章の見出しに種々の時期が正確に記録され、それが更に各節毎に細分化され、数年から数時間に分割されている。これは作者がいかにも建築の関係者らしく、建築進行表を見る思いがする。これは現実的雰囲気を与え、一刻を争う場面では、迫力満点であるとも考えられる。

イングランド中部の町ホックブリッジ（Hocbridge）で、開業中の青年建築家アムブローズ・グレイ（Ambrose Graye）は年末、年始のクリスマス休暇をロンドンで過す。ブラッドレー（Bradleigh）退役海軍大佐の一家と知り合いになるが、一人娘のシシリア（Cytherea）の女王然とした気品に一目惚れする。彼は彼女に求婚するが、一家は忽々と立ち去り、訳の分らぬ挿話に終る。後に判明した所では、二、三年前シシリアはいとこの将校と愛を誓っ

たが、彼は遠く印度に赴任し、彼女の方も保養のため両親と大陸旅行に去ったという。やがてシシリアの母が、イングランド西部の莫大な財産と地所相続のため、ロンドン宅をたたんで、爾後一家の消息は杳として知れぬ。

グレイは八年後平凡な結婚をするが、失意の彼は、快活な性質から憂うつ症に陥って、そのため無理な借金を重ねる。一八六一年、妻が死亡するが、その時、男子オウエン（Owen）は十七歳の建築技師見習、女子は十六歳で、洗礼名はシシリアという。これは父の過去の想いを偲ばせる。

それから二年後の十月のある日の午後である。本書は二人の女性を中心に物語が展開されてゆくが、先ずシシリアの姿態に焦点がしぼられる。「正直な所、身のこなし方は、前進のような一番派手な動作であろうと、眼蓋を上げたり、指を曲げたり、唇を尖らせたりするような微細な動作であろうと、実に彼女のお手のものであった。頭の構え方一つにしても、動くともなく動き、揺れるともなく揺れるといった工合で、まるで磁石の針のように繊細であった。この弾力性や柔軟性は、規則通りに教えこまれたものでもなく、年をとるにつれ、自然に発達していったものである。」（p. 7）この外面的な姿態は彼女の内面的な特質をも示唆する。

例えば、男女一緒のクリスマス・パーティでは、彼女はまだ十二、三歳であったが、ダンスにおける彼女の軽快適切な身のこなし方は、若者達が彼女を我先に選びたがる始末であった。「後になって、女性本能により、自分のこの点が外見上における最善の、かけがえのない特色であることが分ってくると、細部における仕上げに、実に細かい気の配りようであった。」（p. 7）これは、後のファンシー（Fancy）やバスシバ（Bathsheba）のように本能的媚態を有し、努力なしに無意識に男性の心を惹くものがあることを暗示している。

4

さて、その当日、シシリアは公会堂で催されたシェイクスピア(Shakespeare)劇の朗読会に出席した。彼女は忽ち人びとの注視を集める。窓の向うに教会の白い塔の上部が眺められ、足場の上では黒服のシシリアの父が白い作業服の四人の工事を監督中であった。この光景は窓の枠で絵画のように縁どられる。「この光景は珍しく印象的で、黒い窓枠の中にはめこまれた細密画のようであり、密枠の際だった濃い影が、中の物体の柔らかな感じを一層引き立てていた。」(p. 9) 所が、父はなにか心にあらず、という様子でおかしい。と、「父の足が滑って、一瞬体を前と横へ折り曲げたかと思うと、空中によろめきおち、忽ち下方へ姿を消した。」(p. 9) 仰天した彼女は床に倒れ、気を失う。

「嘆かわしい重荷がはこびこまれた時、彼女の目に南西の空がちらっと見え、別に気にもとめなかったが、鉛色の雲間から洩れる幾筋もの輝かしい光線が目にとまった。……何か精神的苦悩があると、心に幾筋もの陽の光線の方が鮮烈に呼び起された。」(p. 11) この幾筋もの陽の光線は、彼女にとっていわゆる悲劇の「客観的相関物」(objective correlative) になると、J・R・ブルックス (Jean R. Brooks) が指摘している。(Jean R. Brooks: *Thomas Hardy*, p. 23)

父の事故死により、莫大な負債の存在が判明する。しかし世間は冷酷である。兄妹は、曽て父を失意のどん底に陥れた謎の女性について語り合い、その所在を問題にする。オウエンは冷淡な故郷を離れた遠隔の地に職を求めることにする。バドマス・レジス (Budmouth Regis) で建築事務所を経営するグラッドフィールド (Gradfield) に就職の依頼書を出すが、臨時の職を得たのみである。それでも二人は追われるようにバドマスに向う。シシリ

アは家庭教師の広告を出すことにする。

5

バドマスに到着した兄妹は下宿を探し、兄は建築事務所に勤務し、妹は家庭教師の新聞広告を出す。主任製図家エドワード・スプリングローヴ (Edward Springrove) の事が兄妹の話題に上る。兄の言葉では、パブリック・スクール出身ではないが、よく本を読んでいて、書物や芸術の価値判断も仲々鋭いものがあるという。彼は農家の息子で、年齢は二十五、六歳。また一寸した詩人で、盛に自作を見せたがる位だった。いずれも雑誌の詩人欄に時折掲載されたものであった。シシリアは兄の言葉からエドワード・スプリングローヴにしんしんたる興味を抱く。しかし、スプリングローヴは二週間後ロンドンに出て一旗あげる積りだという話である。

やがてシシリアはスプリングローヴと近づきになり、数回バドマス湾でボート遊びをする。そして、彼は上京前日シシリアをさそい最後のボート漕ぎの場面になる。彼は彼女に文学上の野望のあとを告白するが、ここに明らかに青年ハーディ自身の姿が投影されている。「ぼくは前から熱烈な詩の愛好者でしたから、詩を絶えず読み続けました。それから自分で詩を作り出しました。もしこの世の中で、身を滅してよい程の有益な余技があって、それに打ちこめば、自分の本業には程々の成功に甘んじていてもよいというのであれば、何といっても感動的な素材で詩を書くということですが、これもいわば栄養失調で、自然消滅ということになったのです。」(p. 48) そして彼はぼくの作詩時代は終ろうとしています、と言明する。エドワードは理想主義者で、自然律と社会の現実に幻滅を感じているのである。

彼はボートの中で彼女に接吻する。その後で、彼はシシリアに隠している事実があることを告白する。「ぼく

にはあなたを愛する権利などなかったのに、愛してしまったのです。」(p. 51)　彼はオウエンにだけ一部始終を打ち明けて、ロンドンに去ってしまう。彼の故郷カリフォード (Carriford) にはアドレード・ヒントン (Adelaide Hinton) という婚約者がいるのに、ついシシリアの魅力に屈したというのである。

6

職種の程度を下げた広告に対しミス・オールドクリフ (Miss Aldclyffe) と称する婦人から、バドマスのベルベデア・ホテル (Belvedere Hotel) において、面接を行う旨書簡が届く。A・J・ゲラード (A. J. Guerard) は、最初の五章は不活発だが、異常な女性ミス・オールドクリフ登場の第六章で活力が復活すると述べている (A. J. Guerard: *Thomas Hardy*, p. 50)。事実彼女の姿は、赤い焔に包まれた黒いシルエットとして印象的に描かれる。「この見知らぬ人は、青味がかった薄暗がりから出て来たばかりで、更にほやほやの空想に駆り立てられたシシリアの目には、焔の中に突っ立っている背の高い黒い人影のように映じた。それはごつごつ骨張ってはいないものの、やせ気味ですんなりした体付の婦人であった。」(p. 58)

後程、シシリアをナップウオーター邸に運ぶ御者は、ミス・オールドクリフを、「サタンのように傲慢な気性」(p. 68) の人と述べ且、「変り易い気性の人、まるで噴水のように、絶えず本人には違いないが、それでいて絶えず別人であるといったような人」(p. 68) と暴露する。要するにメロドラマ的型にはまった暴君型の女丈夫である。シシリアは失格して悄然と立ち去ろうとする。この時シシリアの得手とする歩きぶりが物をいって、彼女の後姿が哀れをさそう。彼女は呼び返されて遂に採用と決る。

7

指定の日にシシリアはカリフォード・ロード(Carriford Road)駅に降り立つ。御者の出迎えでナップウォータ邸(Knapwater)に向う。途中古い領主邸の前を通り、滝と揚水車のエンジンの異様な音を聞く。これらの音は全巻に鳴り響き、異常な事件の前兆を呈す。ナップウォーター邸は、全体がきれいな、灰色の、砂岩で整然とした、十八世紀後期の古典主義的な建物である。下方に見える静かな湖面には白鳥が浮ぶ。

さて、シシリアは与えられた部屋の開いた窓際に腰をおろし、「浄福の乙女」(Blessed Damozel)のように見下す。羊の烙印から、エドワード・スプリングローヴの父がこの村でスリー・トランターズ亭(Three Tranters Inn)を経営していることを知る。

シシリアは早速その晩のパーティの衣裳の着付けを手伝う。夜半パーティ終了後、ミス・オールドクリフは何気なく小さな金のロケットの小型写真を示す。それは意外にもシシリアの亡父であった。しかし彼女は、「美男子でなくって?」(p. 79) とそしらぬ顔である。シシリアは例の謎の女性の正体が分って驚愕する「これまで、自分が想像の世界でのみ見てきた過去のロマンチックな隠れた層が、具体的な形となってここに姿を現わしたのであるが、自分の見る限りでは、それは非常に奇妙な形状をそこに露呈していた。」(pp. 79-80)

夜遅くシシリアは寝につくが、「鏡に映った自分の見事な上半身の姿態をちらっと見て、その自然のままの魅力に注意を払った。」(p. 85) この描写は、次のレズビアン的行為と共に、当時としては大胆なものであろう。

時計が二時を打つのが聞え、廊下に衣ずれの音が聞き分けられた。ミス・オールドクリフがシシリアのそばに入りこみ、彼女の身体に両手を回し、やさしく自分の胸に抱きしめた。そして、「さあ、早く接吻して」とくり

返す。「シシリアは相手の唇に、まるで泡の破れるように、軽く、静かな音をたてて、ほんの一寸触れた。」(p. 88) ミス・オールドクリフはシシリアの恋人を執拗に探り出す。

その未明、滝と揚水車の奇妙な音に交って、静かなゴボゴボという音が、シシリアに聞えた。それは異状な感じだ。更に犬が哀調をおびた吠え方をする。

翌朝、ミス・オールドクリフは、シシリアの恋人エドワード・スプリングローヴが婚約している旨を告げる。その直後、彼女の父の急死が発見される。しかし、彼女には悲しむ様子が見られない。

8

大佐の死亡によって新たに地所差配人の必要が生じ、ミス・オールドクリフはその募集をロンドンの弁護士に依頼する。面接候補者の中に、彼女はイーニアス・マンストン (Æneas Manston) という男をすべり込ませ、無理矢理マンストンで押し切ってしまう。

さて、マンストンが新差配人として着任、旧領主邸に住んで三、四日後のことである。ミス・オールドクリフは、シシリアに、自分の後援するある宗教団体に対する教区民の寄附金集めを依頼する。先ず一人住いのアドレード・ヒントン嬢を訪れる。シシリアはエドワード・スプリングローヴの婚約者と初対面して、本能的嫉妬を覚える。

次はこの村で、スリー・トランターズ亭を経営するエドワード・スプリングローヴの父である。この旅亭は、破風の多い中世風の建物で、往時の珍しく代表的な美しい典型であるが、鉄道の開通によって、馬小屋と共に空き家同然になっている。丁度ワセリンゴの収獲期で、リンゴ酒しぼりの最中である。村人はミス・オールドクリ

フと新差配人の関係について噂をしている。

続いてシシリアは、旧領主邸へ向う。突如、雷鳴が轟いた。前方から滝の落下音、叢林の中からエンジンのきしむ音が聞え、刻々と暗黒と嵐が接近する。邸の建物は異様な青白さを帯びながら、暗い葉の茂みと空とを背景にしてそびえていた。正面のテラスの階段の上に一人の男が立っていた。「半ば位置の関係で、彼の姿が浮彫りになっているのと、半ばは彼の身長が事実そうであることから、非常に背高くそびえているように見えた。輪郭は黒く手を後に組んで、じっと空を見上げていた。」(p. 147) これは、紅い焰を背景に黒いシルエットを見せて登場したミス・オールドクリフと重ねられ、両者共通のサタン性が暗示される。

マンストンはシシリアを見て、驚きと賞讃の色を隠さなかった。大粒の雨が降り出し、稲妻が走り、雷鳴が轟いた。彼は美男子で、年の頃は三十に一、二歳不足していると思われた。しかし、「唇は驚く程厚く、官能的で、女性のような柔かい曲線を描き、そのルビーのような深紅色は非常に強烈で、何か女性美にかかわりがある場合に、極めて感受性の強いことを証明するもの」(p. 149) であった。これは肉感的なアレック(Alec)を想起させる描写である。更に、彼の眼の表情から察するに、「彼は神意に反抗する人のような報復的決意に燃えて、敢然と運命に逆らう人であった。」(p. 149) これは制御しがたい欲情と、不公正な宇宙への反逆心の持主であることを予想させる。

彼はシシリアを、雨宿りのため、狭い玄関に招じ入れる。二人の衣服が触れ合ったが、そのまま身動き出来ない。「どの男性にとっても、衣服は形式的なものであるが、女性にとっては、それは肉体の一部である。……一寸誇張すれば、女性の衣裳は感覚作用を持っていると言えよう。ふさかざりやすそひだの一番へりを少しでもしわよせて見よ、身をつねられたような痛みを与えるだろう。」(pp. 149-150) 従ってマンストンには何でもない

ことだが、シシリアは身体中にぞっとした身震いを感じた。

マンストンはオルガンをひく。その音調は反響し、稲妻と雷鳴という自然の猛威に高められる。変化に富んだその調べに彼女はつい魅せられ、『リールズのヴァイオリン弾き』(*The Fiddler of the Reels*)のような音楽の魔力に催眠状態に陥る。

やがて「彼女に対する影響力は、楽器をひき終ると同時に消滅し、彼女は彼に背を向けた。」(p. 155)

帰邸したシシリアは、エドワード・スプリングローヴ宛に怒りをこめて訣別の手紙をしたためた。一方先刻美しい音色に酔ったあの異状な一時から醒めたシシリアは、マンストンに断り状を出す。

9

十一月中旬、シシリアの兄が邸を訪れ、翌未明彼女に送られて駅に向う。途中、旧領主邸から防水マントをかぶった女性が秘かに出て来るのを発見する。

クリケット(Cricket)のお上さんが、旧領主邸の世話をしているが、この朝ベッドで、茶色の毛髪一本を発見して驚く。女郵便局長リート(Leat)夫人のもとに持参し相談するが、マンストンに妻があるのではないかと疑う。

ミス・オールドクリフ宛にマンストンの妻から書状がくる。内容はマンストンとの仲を疑う噂を種にした脅迫状である。彼女はマンストンを呼びつけて詳しい事情を問いただす。マンストンに依れば、彼女は、アメリカからやって来た劇団の三流の女優で、昨年偶然知り合ったが、一週間でけんか別れをした。しかしロンドンまで連れて来て、快適な住居に住まわしてあり、名前はユーニス(Eunice)という。

ミス・オールドクリフの命で、マンストンはユーニスに手紙を出し、彼女を引き取る旨を告げる。彼女の到着

の日、マンストンは生憎時刻表を見誤って、駅に出迎えてやれなかった。憤慨した彼女は、赤帽に手荷物を持たせて、旧領主邸に行くが、錠がかかっている。激怒したユーニスは、スリー・トランターズ亭に案内されて、部屋をとる。

10

この夜、本書の重大な転機になる異状な事件が連続発生する。旅亭のそばの地所の真中に、枯れたヒメカモジソウが山積みされ、点火後三日間、くすぶって燃え続けていた。ここで、自然律の冷酷で恣意的作用の実例が示される。くすぶっていた雑草に火がつき、草ぶきの屋根と、気紛れで反逆的な突風の相互作用で旅亭が焼け、更に周辺家屋も焼尽してしまう。火災の経緯は五分単位で微細に語られ、自然の邪悪さが浮彫りにされる。「実の所反逆的な火が、惨禍をひきおこす絶好な機会が到来した事を知っていたかのように思われた。」(p. 193)

猛火の中から、やっと老スプリングローヴは救出されたが、「一人客がいたのを忘れていた」と叫ぶので、大騒ぎになる。宿泊中の筈のマンストン夫人の姿が見えないのだ。翌朝遺品として、時計、鍵束、黒焦げの二本の骨が焼け跡から発見される。検死法廷が開かれ、数人の証人の証言の結果、マンストン夫人は焼死したものと評決される。従って、マンストンは自由な身の上になったと、世間から見られる。

老スプリングローヴは保険に入っていなかったため、全家屋を強制的に再建させられる、焼失家屋貸借契約の条件を充たされない。ミス・オールドクリフはこれを利して、エドワード・スプリングローヴにシシリアを断念するように説得する。エドワードはシシリアに別れの手紙を出して姿を消す。

11

第十二章は続く十か月間の出来事を扱う。ミス・オールドクリフはシシリアにマンストンとの結婚をすすめるが、肯じない。またマンストンの直接の求婚も拒否する。その頃、兄オウエンから、左足の膝と踝の間の異状な痛みを訴えてくる。マンストンはオウエンの援助を申し出て、シシリアに結婚を迫る。

ある日、シシリアとマンストンの二人は湿地の川のそばで会うが、背景の自然が人物の心情に微妙な変化を与えることになる。「重苦しいばかりの静寂さにふさぎこんだ彼女は、唯受動的な黙従的態度をとるばかりであった。このしめっぽい場所で彼女の望むことと言えば、唯じっと動かずに立っているだけであった。」(p. 251) マンストンは求愛し、二人はお互いの衣服が触れ合うほど近づいて来て、彼は彼女の手を握りしめる。シシリアは「一面にマンドレークが密生していて、その叫び声が聞えてくるような気がした。」(pp. 251-2) 彼女は手をひっこめられなかった。彼女は「まるで櫂のない小舟に身を託し、どこへ行くのか分らないまま、目を閉じて川を下って行くような気がした。」(p. 252) マンストンの病気の兄への親切、彼の熱愛、エドワードの裏切り等で動揺していたので、シシリアは自然の影響に、つい身を任せてしまったのである。

ある日曜日、会衆の去った教会の中で、「薄れゆく夕日の赤い光」(p. 257) を浴びて、シシリアはマンストンに承諾を与えてしまう。接吻を強要されるが、「神様に近すぎます」(p. 258) と拒否する。結婚の日取は一旦旧クリスマスと決めたが、あとで旧クリスマス・イヴに変更する。マンストンは「我々は罪を犯していないと考えるよりも、罪を許されているという風に考える方がずっと快いものです。」(p. 259) と述べるが、後の犯行の発覚に対する伏線と読みとれぬこともない。

12

第十三章は結婚式の当日を扱っている。前夜のシシリアは、「その人の面前にいるとつい魅せられて無意識のうちに振舞い、その人のいない所では彼に恐怖心さえ抱く男性」(p. 263) のことを考えている。邸の壁の外で、鈍い音が聞える。物音は段々大きくなり、だれかが彼女の窓の下の壁を、一束のしなやかな棒で叩いているようだった。ミス・オールドクリフの父が死亡する夜半の異常な音を思い出し、自分は騒音に運命づけられていると考える。やがてうとうとと眠る。夢を見る。彼女は「ひもで吊された、干からびた骸骨で打ち叩かれ、一撃毎にその骸骨が、まるで絞首台上の罪人のそれのように、がらがら音をたてた。彼女はその打撃をいちいちかわし、避けていたが、遂に自分が縛りつけられている壁の上へ落下してくる夢を見た。彼女は、仮面をつけているために、死刑執行人の顔を確認することは出来なかったが、その容姿はマンストンに似ていた。」(p. 265)

シシリアは、テス (Tess) やシュー (Sue) のように理性と本能との闘いに苦悩し、自虐的罪悪感にさいなまれた女主人公の前身である。「それにも抱らず、消滅した苦悩を再生して、折にふれ自分の心を傷つけるという、女らしい快楽に耽ってみないわけにはいかなかった。」(p. 253)

午前中は悪天候である。台所に集まった人びとは、エドワードの婚約者ヒントン嬢がボレンズ(Bollens)と昨日結婚した、という噂をしているが、シシリアには知らせない。天候がやがて収まり結婚式が行われ、登録される。突如、エドワードが教会の中の物陰に、幽霊のようなやせた姿を現わす。シシリアは直ちに気付くが、マンストンは見ない。彼は一年間音信不通だったのだ。「一目見ただけで情熱が再燃するという奇妙な現象は、男性よりも女性の場合によくあること」(p. 273) である。彼女は苦悶の色を浮べる。彼は影の如く来り、影の如くに去った。

その午後新婚旅行に出発する合間、彼女は兄に、エドワードを全身全霊を打ちこんで愛している旨を打ち明ける。しかし兄は、「社会やお前の周囲の人びとに対する義務からいっても、この際良妻らしく振舞って、お前の夫を愛するように努めなければならない。」(p. 275) と説教する。シシリアは社会への義務を説かれても、いかに社会は冷酷で無責任なものであるかと反駁し、個人の本質的独立性を強調する。

シシリアは邸園外辺の牧草地と境をなす小川の向う側に一人の男を見る。水面に映る人影はエドワードだ。二人は小川を隔てて話す。昨日いとこのヒントン嬢が結婚したので、今や自由の身になった。「もう一度あなたの意思を確かめようと思ってあなたの所に来たのですが、でも遅すぎました。」(p. 279) と、テスと同じような悲痛な叫びをあげる。また、シシリアがマンストンに出した断り状をたねに、ミス・オールドクリフに欺されたことも判明する。二人は手を伸ばす、辛うじて指先が触れる。

13

C・J・P・ビーティ(C. J. P. Beatty) は、本書は当然二部に分れ、第一部は第十三章第四節のシシリアの結婚で終る。以後シシリアは姿を消して、男性達がとって代り、ウィルキー・コリンズ流の煽情的場面に転ずる旨を述べている。(cf. *Desperate Remedies* [The New Wessex Edition], p. 12) またA・J・ゲラードも、第十三章の終りで本書は一応の終止符を打っているのに、尚百三十五頁を余している、というのも、同じ不満であろう。(cf. Albert J. Guerard: *Thomas Hardy*, p. 50)

さて、新婚夫婦は、パリーを目指し、先ずサウサンプトン (Southampton) に向け出発する。その後、赤帽チニー(Chinney) がローナム (Raunham) 牧師に重大な告白をする。例の大火のあと、マンストン夫人が駅に姿を現わ

したというのである。夫人が生存していれば重婚になる。エドワードとオウエンが相ついで新婚夫婦のあとを追う。赤帽の署名入りの告白状をマンストンに突きつけ、オウエンはシシリアをバドマスに連れ帰る。

マンストンはローナム牧師の忠告をいれて、行方不明の妻捜索の広告を出す。やがてマンストン夫人と称する女性がロンドンからやって来る。マンストンは彼女と一緒に村中を歩き回り、このような簡単な解決法で世間の臆測に終止符を打ったかにみえた。

オウエン兄妹は、改築予定の教会工事監督のため、トルチャーチ（Tolchurch）の古い農家を借りる。エドワードは改めてシシリアに結婚を申し込むが、シシリアはあらぬ噂を気にして断る。

エドワードはマンストンが始めから重婚をはかったと疑い、兄妹もマンストン夫人について調査しようと決意する。ロンドン在住のエドワードは、マンストン夫人のロンドンでの下宿先をつきとめ、質に入っていた裁縫箱を探しあてる。ふたの裏側に、マンストンと夫人の写真が二枚入っていたので、エドワードはグレイに送る。しかし背の高い外套をまとった男が、外から一部始終を見守っていたが、やがて立ち去る。エドワードは更に詩を書いた紙切れを発見し、後便で送る。

謎の男はマンストンで、エドワードの発送した手紙のあとを追う。そして翌朝トルチャーチ区域担当郵便集配人に途中で話しかけ、ブランディを飲ます。酔った集配人をだまして、旨く手紙を抜き取り、同封の写真のうちマンマンストン夫人の分をすりかえる。

写真に次いで、短詩がオウエンの許に届く。それは次のような詩である。

ユーニス

幾時も、幾日も長く
彼女の変幻極まりない姿をみつめ
はた　目をそらす者、だれも思い浮べるのは、
天の川のように
　　おぼろにかすむ肖像画のみ。
夏空に輝ける夏の日々のように
青い瞳の光に照らされて、
彼女の美しく変る容姿は、
うす紅色に染められた旋律のように
　　さだかなる形をなさぬ。

Æ・M・(p. 348)

オウエンは失望するが、シシリアは詩の中の「青い瞳の光」にふと気付き、現在のマンストン夫人の眼の色を確かめようと提案する。オウエンは口実を設けて夫人に接近して、「目が闇夜のように漆黒」(p. 368) であることを確認する。薄茶色の髪もかつらしい。

オウエンはローナム牧師にすべてを打ち明ける。更にエドワードは問題の女性は、アン・シーウェイ (Anne Seaway) と云う替え玉であることを、ローナムに証明する。ローナムはマンストンに手紙を出し、疑惑を突きつける。窮地に陥ったマンストンは、どうやら逃亡の用意をはかっている模様である。

14

本物のマンストン夫人の行方が、疑惑の焦点となる。第十九章はマンストンの犯行暴露の一昼夜の出来事である。

「ハーディは全能者の視点からこの小説を書いている。この技法はミステリを含まず、読者が犯罪の動機に納得し、ある程度同情する恋愛悲劇には十分である。」(*Desperate Remedies and the Victorian Sensation Novel* [*Nineteenth-Century Fiction*, Vol. 20, No. 1, pp. 44-45]) とL・O・ジョーンズ(Lawrence O. Jones)が指摘している。しかし、煽情的またはミステリ小説では、そのような技法は不適当である。例えば、ウィルキー・コリンズは『月長石』(*The Moonstone*)と『白衣の女』(*The Woman in White*)において、一連の人物に物語を語らせて、ミステリの段階的解明を展開したのである。

ハーディもある程度意識していたのか、これまでの全能者の視点から、本章は一転してアン・シーウェイの視点に移動している。

アンは慌しいマンストンの様子を監視する。マンストンは州都の銀行に赴き、どうやら一人で高飛びの気配である。夕方ミス・オールドクリフが訪れて、何やら密談する。夜、マンストンはアンに睡眠薬を飲ませるが、彼女は飲んだふりをする。真夜中、マンストンは抜け出し、アンはあとを追う。離れ家の戸棚で隠されていた壁の部分をはがし、かまどの中から重いかさばった袋を引っ張り出す。彼は袋を背負い庭に出る。おぼろ月の光が外形を照らす。彼はすきを持っている。所が、長いマントの男があとを追い、更に背が高く、黒っぽくぴったりと身を包んだ女が続き、アンは最後の女性のあとを追う。彼は林間の空地を横切って、農場に入り、滝と揚水車の

中間の葉のつもっているくぼみを掘りおこして袋を埋める。その時、黒い女の「逃げろ！」で、マンストンは逃亡する。袋の中味はユーニスの死体であった。

マンストンはフランスに逃亡しようとして失敗後、トルチャーチのシシリアのもとに姿を現わす。無理に侵入するが、エドワードが駆けつけて来て、遂にマンストンは逮捕される。

15

第二十一章は、それから一週間後のことである。老スプリングローヴとベーカー（Baker）の二人は、州刑務所に棺が運びこまれるのを見て、マンストンが首を吊って自殺したことを知る。老スプリングローヴはマンストンの棺が死者に威厳を与えるのを見て、悲劇事件は運命の必然的働きの結果であることを暗示する。「我々はただ突然死滅に出くわすだけのことで、それは他のすべてのもの同様、慎重に考案されており、そもそも当初から、ちゃんとそこに存在していたのですよ、そんなに早く訪れるとは思っていなかっただけで。」（p. 427）

マンストンは遺書を残していた。「人間の一生というものは邪悪に考案された仕組であることが判明したので、私はそれに見切りをつける。」（p. 428）と書き出している。大火の晩、我が家に入るや否や、「嫌悪の念を抱いていた女性への束縛から解放されたことに対し、神に感謝したあと」（p. 429）、また火事の現場へ行った。再び家に帰ると妻がいた。彼は激しい絶望におそわれる。「つい先程感謝したばかりの神は私を苦しめて、あざ笑っているように思われた。私は発狂したような気持になった。」（p. 429）彼女はミス・オールドクリフとマンストンに関する秘密を嗅ぎ出しておどす。激怒に駆られ、彼女をなぐると死亡したという。そのあと例の証拠湮滅を計ったが、密猟者の疑惑をふと耳にして、妻の替玉を探した旨を述べている。最後に、「私はこれから正常な状

態に入って行こうとしている。というのは、人間は殆どいつも墓の中に入っているのだ。人間の長い生存競争を見渡しても、いよいよもって奇妙なことに、大部分は死者であり、それ以外の何ものでも決してなかったのである。」(pp. 434-435) という厭世観で結んでいる。

ミス・オールドクリフは、マンストンの悲報を聞いて内出血で倒れ、シシリアを呼び寄せる。彼女のやせた顔から傲慢さが消え、やさしい、温和な平静さがそれにとって代っている。彼女はシシリアのゆるしを乞い、自分の身の上の真相を告白する。三十年以上も前、十七歳の娘が、いとこの二十六歳の放蕩将校に裏切られた。彼は印度に赴任し死亡する。彼女はドイツで赤ん坊を生む。ロンドンのある家の入口の踏段に、お金に洗礼名イーニアスを附した手紙と共に、赤ん坊を捨てて逃げたという。それがイーニアス・マンストンである。一年三か月後、彼女はアムブローズ・グレイにあって、初めて精神的に、真実に愛されることの尊さを知ったという。厳格だった彼女の父の死後、漸くイーニアス・マンストンを差配人として手許に呼び寄せられたのである。「私は彼をお前の夫にしたかったのですよ、シシリア！　私の真の恋人の子の夫に。それが私の楽しい夢だったのよ。」(p. 439)

シシリアは翌未明、夢かうつつか、ミス・オールドクリフの弱々しい姿をありありと見る。「その途端に彼女は恐怖というよりも畏怖のこもった一種の呪文にかかったように、その場に釘付にされた。」(p. 440)　シシリアはあっと叫んだ。その瞬間、呪縛が解けて、完全に目がさめる。姿は消えていた。

シシリアというのは女神アフロディティ (Aphrodite) の異名で、シシリアの息子とは、当然イーニアスのことになる。ミス・オールドクリフは過去を理想化し、いわばシシリア二世と私生児イーニアスの婚姻によって、自己の実らざりし恋を現在に実現しようと計ったのである。しかし過去が暴露されると共に、シシリアは呪縛から解放されたのである。

更に十五か月が経過して、エドワードはシシリアと結婚する。ミス・オールドクリフは、一切の動産、不動産を「イーニアス・マンストンの妻」に遺贈していた。しかしシシリアは権利をローナム氏に譲った。エドワードは代理人兼差配人として雇われ、シシリアと共にナップウォーター邸に住むことになった。

最後は、新婚夫妻が湖上で小舟に乗る場面で終るが、これは冒頭のバドマス湾の再現であって、ハーディが得意とする反復の技法である。

16

『非常手段』の一九一二年八月の序文を読めば、ハーディが小説以前に詩作に耽っていたことが明らかである。「読者はこの煽情的で、極めて型にはまった物語を読んでゆくうちに、そこに散見される思想や、感受性が、その後幾年も経て出版された『ウェセックス詩集』(*Wessex Poems*, 1898) その他に見られるものと本質的に同じであることに気付くであろう。そのような重複が生じたわけを弁明すると、それらの詩はこの小説より以前に書かれたものであるが、著者としてはそれを出版する機会がなかったので、どうしても、詩の内容の中で、著者の意図する所にふさわしいと思いついたものをすべて、ここに利用しないわけにはいかなかった。というのは、随時散文中に取り入れた後、それらの詩が将来陽の目を見ようとはその時、予想していなかったからである。」

六年間のロンドン滞在中、激動する当時の中央界の新思想の刺戟を受け、青年ハーディの思想は既に懐疑的に傾いていた。『ウェセックス詩集』の中で、一八六〇年代の詩が十数編あるが既に懐疑思想を秘めたものが多い。ただ詩の場合には、思想や感受性が凝縮されて見事に晶化され易い。それに反して小説の場合にはそれらが生のまま粗雑に露呈し易い。即ち本書の場合、神や自然や社会に対する不信感が点綴されているが、生硬な不消化な

感じを与えている。『スペクテイター』が「犯罪の詳細について低劣な好奇心」を鼓吹しているとか、「獣性以外なんらの感情の展示がない」とか「キリスト教道徳の見現がない」(R. G. Cox〈ed.〉: *Thomas Hardy, The Critical Heritage*, p. 3) と評したのもハーディの第一作としてはある意味でやむをえないであろう。

ヴァージニア・ウルフ(Virginia Woolf) は『非常手段』について、次のように述べている。「彼は決して自信のある職人ではなかった。彼は彼自身言ったように『一つの技法を摸索していた』のである。恰も自らあらゆる種類の才能を所有しているが、それらの性質を知らないか、あるいは有効な利用法を知らないことを意識していたかのようである。……しかし彼は、もっと大きな意味で、一つの力としての自然に気付いている。自然の中に、人間の運命に同情したり、嘲笑したり、または無関心な傍観者でおられる精を感じている。」(Virginia Woolf: *The Common Reader, Second Series*, pp. 245–6)　ここに小説の技法の摸索に悩むハーディに一つの方向が示されたのである。

(『非常手段』のテキストは Pocket Macmillan Edition, 1953 を用いた。)